双葉文庫

魔笛大名

早乙女　貢

双葉社

魔笛大名（まてき）

双葉文庫　さ 02-17

昭和63年7月25日　第1刷発行　定価380円

著者　早乙女　貢
発行者　清水文人
発行所　株式会社双葉社
〒162　東京都新宿区東五軒町3番28号
TEL　東京（268）5111（代表）
振替　東京8－117299

印刷
製本　共同印刷株式会社

©Mitsugu Saotome　1988 Printed in Japan
（落丁・乱丁本はお取りかえいたします）

ISBN4-575-66038-8

双葉文庫

魔笛大名

早乙女　貢

双葉社

目次

魔笛大名　5
影の女　47
かげろう姫　81
冷たい手　115
赤い痣　151
枕絵の女　179
江戸の悪霊　219

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

魔笛大名

紀州伊都郡花園村の新子（あたらし）といえば、現在でも非常に交通の不便なところだ。夏なお寒い高野山からさらに東へ四里ほど、杣道（そまみち）をわけ入ったあたりにある。

幽邃閑寂（ゆうすいかんじゃく）の盆地で、平家の落武者部落であるが、ここで三体の白骨（はっこつ）が発見されて大さわぎになった。

山津波の被害を調べにいった藩の山林方（かた）の者が発見したのである。

白骨は洞窟の中にあった。入り口が密閉されていたのが、山波によって一部がくずれたために日の目を見たのだ。

ただちに和歌山に急使がとぶ。

三体の白骨という点に重大な意味があった。城中城下、騒然となった。

「――場所と申し三体と申し、新太郎君（ぎみ）とお側役（そばやく）二名の遺体にちがいない！」

十年前――現藩公の兄君にあたる新太郎君は高野山に参拝して護摩壇（ごまだん）めぐりの途次、この地で行くえ不明になっている。当然紀伊五十五万石をつぐはずだった。

この不慮の失踪のため次男鶴千代君が立った。
これが現藩公たる三位中納言である。
参勤交替で江戸屋敷にある殿さまに早馬がとぶいっぽう横目付下役などが郡奉行らと現地にむかった。
遺体確認のために――

もと新太郎君お側用人であった、伯父の結城直右衛門に、一ノ瀬半四郎が呼ばれていったのはその夜のことである。
伯父はお代がわりと同時に隠居願いで城北に隠棲していたが、さきごろから中気を病み、ずっと寝たきりであった。
「話は聞いたであろうな」
のっけから、伯父はいった。
「若君のことじゃ！」
十年来、伯父は新太郎君のことを若君と言いつづけているのだ。
「はア、家中そのことで大さわぎです。ご遺体に相違ないと断言する者や、白骨にはめじるしがあるまいなどと反駁する者や、いやもう、まるで、謎ときですな」

「不謹慎なやつめら」

「それアしかたがありません、どんな山賊か他国者かもわからないのですから。しかし、ひょっとしてご遺体だったとしてもですね、仏舎利ではあるまいし、大さわぎするのはどうかと思うのですが」

「そちにはわかるまい。そちは、あのご不慮のとき、まだ十二、三の子供であった」

「十年前ですからね」

「若君は英邁であらせられた。若年ながら発明なおかたで、われら一統いかばり、ゆくすえを期待申しあげたことか。五十五万石の太守にふさわしいおかたであったのに……」

「……」

「大きな声では申せぬが、ご当代さまは凡庸なおかたじゃ、江戸でおうまれあそばされて、ご家督なされるまで紀州をご存じない。ま、これは大公儀の掟ゆえしかたはないが、君主と庶民のあいだに心がかようてはいぬ。われらの失望杞憂が現実となったのじゃ」

激昂した声を、みずから恥じるように、伯父は声をおとした。

「そちをまねいたは愚痴をのべるためではなかった。こたびの知らせでじゃ、不審が一つある」

「不審というと？」

「その洞窟の入り口が十年間密閉されていたというではないか。若君は何者かの手で生きうめに

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

されたのじゃ」
「だれかに……」
「だれか、じゃ。だれかが、やった。そちに、それを探ってきてもらいたいのじゃ」
「しかし、十年も前のことを」
「白骨は語るまい」
沈痛に老人はいった。
「が、若君のご無念は魂魄となって、地上の闇をさまよっておられる。できればわしが行きたい、行って探りたい。そしてこの手で若君の仇を討ちたい！」
「伯父上！」
「かなしいが、なあ、それもかなわぬよ。この足が憎い。そち以外に頼む者がおらぬ。の、頼まれてくれい、若君の霊は、かならずや、下手人を知らせてくれようぞ」
「わかりました」
と、伯父の熱意にうたれたように、まじめに半四郎はうなずいて、
「ですが、なっとくのゆかぬことがあります」
「なんじゃ」
「白骨の調査には大ぜいの者が今夕、出立しました。いまさら、わたしがひとりで調べにまい

っても」
「おろかな小役人どもは、白骨がご遺体がどうか、真偽を調べにまいったのであろうが」
「はあ、そうですな」
「そちの目的はちがう。下手人じゃ、若君を弑したてまつった憎き極悪人を探るのじゃ、したがって、そちは目的を秘めてゆかねばならぬ」
「え？」
「行動は隠密にやらねばならぬのじゃ。お届けは病気のため湯治とでもしての」
「花園村に出湯がありますか」
「竜神ノ滝に行くと称して、迂回の途次と見せるがよかろう」
「なんだか、忍者か細作じみていやですな」
十年前の秘密をどうやって探りだせばいいのだ？
可能性のないことで、急に、伯父の依頼が重苦しく感じられた。
返事を保留して屋敷へもどっても、耳に伯父の狼狽の悲痛な声がこびりついてはなれない。
行燈の灯を大きくして刀の手入れをはじめた。
愛刀にタンポを打って、なん度もなん度もぬぐう。強からず弱からず、ソフトにリズミカルに打ち、ぬぐいをくりかえしているうちに、ようやく気がしずまってくる。

五本目を手にとったとき、泡を食った中間が駆けこんできた。
伯父の中間で三次という男である。
「たいへんでございます、押し込みがはいりました」
「なンと、伯父ごのもとへか？」
反射的に愛刀をつかむや半四郎は走り出ている。不吉なものがひらめいた。
だれの目にもゆたかと見えない隠居屋敷だ。金品めあての賊がはいるはずがない。
「覆面した男五人ばかり。いずれも腕の立つやつばらでございました」
という三次も、顔や手足に抵抗のあとの、スリ傷がなまなましい。
「や、おそかったかッ」
広くもない屋敷のなかは、つむじ風がとおりすぎたかのようにひっかきまわされていた。
ふとんから身をのりだすようにして、血の海のなかに、伯父がもがいている。
「伯父上！　半四郎です、お気をたしかに」
抱きあげて、ぞっとした。
むざんな袈裟がけの一刀が、すさまじいばかりのふかさだ。ひと目で致命傷としれた。
もはや死の影を見ていたかのような双眼がカッと見ひらかれて、
「こ、これを……たのむ」

最後の気力でわななく手がまくらをつかんだ。
「これを……」
疑惑に答える力も、すでに老人にはなかった。
断末魔の痙攣がきた。伯父はもがきながら、何か言おうとしている。
色を失った唇が動いて、
「さ、三次を……」
「三次を呼びますか」
しかし、それっきりだった。伯父はがっくりと半四郎の腕のなかにくずれこんだ。
半四郎はふりかえった。しきいぎわにぼう然と三次が立っていた。あおい顔だった。

中一日おいて一ノ瀬半四郎は城下を発足した。
――伯父上、かならず下手人はつきとめてみせますぞ！……
死体に誓って出た半四郎だった。
若君新太郎殺しの下手人探索が、伯父を切った下手人につながるであろうことは、子供でも想像がつく。
三次のことばにうそはなかった。

白刃をひっさげた覆面の怪漢五人が、不浄口から逃げだしたことは、近所の人が目撃している。

「伯父上が、おまえの名を呼んだのは、おれの供をするようにという意味だったのだろう」

半四郎はそういって、ひきつれてゆくことにした。

病気療養のお届けも、こんなあわただしい出立は、普通では許されないが、上司の大村友右衛門が伯父とは故友で、格別に計らってくれたのである。

もともと古い主従ではない。

三次はいわゆる渡り中間で、江戸や大阪でよからぬことをしていたらしい。桂庵を通じて結城直右衛門に奉公するようになった。

半期の契約だと聞いた。まだやっと三月になったかならぬかに、この異変である。

むろん、主人は結城から一ノ瀬に代わったわけだ。

三次は、若い主人に仕えるほうが張り合いがある、といった。

背が低く肩の張った、いかつい顔で、あまり人好きのする容貌ではないし、へらへらしたところが気に食わないが、伯父の臨終のことばもある。

――伯父が見こんだとすれば、どこかいいところがあるのだろう……

と、軽い気持ちで召しかかえると、旅に出たのだ。

三次はそんな半四郎を甘く見たように、なれなれしい調子で、
「ところで、あのまくらン中には、いったい何がはいっていたのでございます？　なんだか、たいそうな秘密がはいっていたようで」
「なあに」と、半四郎はようやく朝霧がはれてのぼってきた太陽にまぶしく目をほそめながらいった。
「金さ……」
うたがわしげな視線を意識して半四郎はけろりとうそをついている。
実は二重底になったまくらのなかに、意外なものを発見したのだ。つづれ錦の笛袋である。
別段かわったところもない、ただの笛袋。それが何を意味するか、しらべるひまもなく懐中にしてきた半四郎だった。
花園村にゆく道は二つある。高野山頂上を経由してゆくそれと、有田川沿いにのぼってゆくのとある。
半四郎は竜神ノ湯へゆくという口実のために後者をとったのだが、和歌浦の景色を右手に見ながら進んだのちに、立場で馬をもとめた。
山越えしての近道をとることにした。塩津からおよそ二里、引尾峠にかかったころは、つるべおとしの秋の日がおちて、足もとから宵闇がわきあがっていた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com